

# 7歳の壁を乗り越える

田口 貴春

岡山D&Lスクール代表

2019年6月9日

# 岡山D&Lスクール

## 指導の基本的コンセプト

1. 筋道を立てて考える力
2. 考えを相手に伝える力
3. 先を見通す力

これらの力を付けること

ここでは一番土台になる部分のお話をします

# 7歳(小学校入学)までには獲得しておきたい能力

個人的には以下のことができることが必要だと思っています。

ひらがなは読めてかけること

カタカナは最低でも読めること

短い文を読めること

短い文が書けること

家族と会話ができること

友達との会話ができること



最低でも20まで、できれば50ぐらいまで数えられること。

量としては10ぐらいまでの大きさが比べられること

数が増えていくことがイメージできること

数が減っていくことがイメージできること

# 7歳とはどういう時期なのか

一般的には小学校へ入学する時期

勉強することが可能になる時期で、教科学習に耐えられるだけの能力が身についている

それまでの育ちの中でどれだけの能力を身につけてきたかが問われる

獲得している能力の中で、何らかのつまずきや遅れがあるとその後の学習に支障を来すようになる

# 7歳の壁をうまく越えられないと

- ・学習に大幅な遅れを見せるようになる
- ・友達との関係もうまくいかなくなる
- ・先生や家庭でもぎくしゃくした関係が生まれる

その結果 最悪の場合

- ・進学に大変苦勞するようになる
  - ・不登校を起こす
  - ・家庭内暴力をふるうようになる
- 社会生活を送れなくなる

# 7歳にはどういう能力が身につくのか

ピアジェの発達理論を参考に

感覚運動期 (sensory - moter period, 0 ~ 2歳) .....心の内面に心的イメージである“表象”を作り上げる能力のない未熟な段階で、五感の感覚情報とそれに対する反射行動(運動)が結びついている。自分と他人を区別する能力も発達しておらず、自他未分離な『自己中心性』を持っており、その後の発達段階において『脱中心化』という自己と他者の識別能力の獲得が発達課題になる。

前操作期 (preoperational period, 2-7歳) .....心の内面に心的イメージ (心像) である“表象”を作り上げることができるようになるが、その表象を論理的・一般的思考の道具として使いこなすことはできない。

『表象形成能力』により、実際に目の前にはない対象を記憶したり関係性を意識したり、言語的な表現を行ったりするようになるが、自他未分離な自己中心性を脱しきれていない段階である。

表象・概念の操作をすることはできないので『前操作期』と呼ばれるが、表象の社会的イメージの記憶・同一化の心理機制を活用して『ごっこ遊び (ままごと・お医者さんごっこ・買い物ごっこ)』ができるようになる。



具体的操作期 (concrete operational period, 7-12歳) ..... 表象を具体的な事物・状況を利用しながら操作できるようになる発達段階であり、『数・量の保存概念』を理解できるようになったり『自己中心性の離脱(自他の分化・相互作用)』が起こってきたりする。


物事を考えたり、考えることをやめたりといった『思考の可逆性』も生まれてくる。心像や記憶、イメージなどの表象を操作することで思考内容が高度になってくるが、外部の事物の助けを借りずに『頭の中だけで行う論理的(数理的)あるいは抽象的な思考』は十分に発達していない。

複雑な抽象思考や概念の操作を行うことは難しい。

形式的操作期 (formal operational period, 12歳以降) ……

“表象・概念・記憶”を自由かつ論理的に操作することが可能になる発達段階で、他者と共通理解可能な形式的操作と抽象的・論理的な思考の操作によって『科学的思考(仮説演繹思考)』ができるようになる。

J.ピアジェの発生構造論で仮定される人間の思考・知能の到達地点であり、目の前に存在しない抽象的な概念や観念的なイメージを、論理的かつ一般的な方法で操作してコミュニケーションすることが可能になる。



ピアジェの認知的発達理論 ~ 子供の思考過程(認知機能)の発達段階の分析 ~

<http://www.rui.jp/ruinet.html?i=200&c=400&m=321323>

より引用

# 7歳は能力がワンステップ上がる時期

具体的操作期 (concrete operational period, 7-12歳)

ものを考えることができるようになる時期

学習が本格的にできるようになる時期

# 軽度発達障害の子どもとは

- 1.学習障害(特定の「読み」「書き」などが苦手な子ども)
- 2.注意欠陥 / 多動性障害(落ち着きがない、不注意な子ども)
- 3.広汎性発達障害(人とのコミュニケーションが下手、こだわりがある)

## それぞれの障害の特性

- 言葉の発達の遅れ
- コミュニケーションの障害
- 対人関係・社会性の障害
- パターン化した行動、こだわり

知的な遅れを伴うこともあります

自閉症

広汎性発達障害

アスペルガー症候群

- 基本的に、言葉の発達の遅れはない
- コミュニケーションの障害
- 対人関係・社会性の障害
- パターン化した行動、興味・関心のかたより
- 不器用（言語発達に比べて）

注意欠陥多動性障害 AD/HD

- 不注意（集中できない）
- 多動・多弁（じっとしてられない）
- 衝動的に行動する（考えるよりも先に動く）

学習障害 LD

- 「読む」、「書く」、「計算する」等の能力が、全体的な知的発達に比べて極端に苦手

※このほか、トゥレット症候群や吃音（症）なども発達障害に含まれます。

# 指導のポイント

1. レディネス指導
2. イメージ指導
3. 考える力の指導

ここではレディネス指導を中心に話を進めます

# レディネス指導

## 1. レディネス指導

### レディネスとは

準備のできあがっている状態のことをいう。歩行のような運動機能や数概念理解などは発達段階に達しなければ練習や学習の効果はない。心身ともに成熟して、新しい行動に移る準備ができていないからである。



# 軽度発達障がい児が学習につまずく理由

## 軽度発達障がい児が学習につまずく理由

「発達段階に達しなければ練習や学習の効果はない。心身ともに成熟して、新しい行動に移る準備ができていないからである。」

彼らは発達のアンバランスがあり、どうしても遅れる部分が出てくる

その部分がレディネス不足として現れてくるのでそれを指導することが大切なことになる